

## 21 . マリアン・アリマンゴの伝説(タガログ)

昔、若く美しいマリアという名の女の子がいました。彼女は親切で思いやりのある、従順な少女でした。しかし、ある日、マリアの母が亡くなり、心を取り乱し、毎日、愛する母を亡くしたことを泣いていました。

マリアの父は、娘の心の乱れをどうしてやることもできませんでした。その時、彼は、毎日彼女のそばに居てやれませんでした。なぜなら、しばしば、仕事のために家から離れなければならなかったからです。それで、マリアの父は再婚を決意し、彼女の世話のために、新しい母が来ることになりました。彼女の新しい義母にも、飾り気の無いふたりの娘がいて、マリアの遊び友達になれるはずで、彼女の心を忙しくさせ、愛する母のことを考えるのをやめさせることができるはずでした。

マリアの父は、娘が新しい母とふたりの新しい友達で、喜ばせることができると思って、安心して長い旅に出ました。

しかし、一旦彼女の父が出てゆくと、マリアの生活は、全く変わってしまいました。良くではなく、悪い方向に。彼女の義母とふたりの地味な娘は、マリアの美しさに嫉妬して、彼女を憎みました。彼女らはマリアに、すべての雑用を押し付け、彼女は、その家で、女中以上の何者でもありませんでした。彼女らは、マリアを夜明けから夕暮れまで、家の掃除、炊事、皿洗い、服の洗濯、アイロン、庭の井戸からの風呂の水汲みなどで働かせました。

マリアは、母とふたりの娘の食事が終わるまで、食事は許されませんでした。その時まで、マリアのおなかを充たすのに十分な食事は残っていませんでした。彼女はしばしばベッドへ行き、疲れて、空腹でした。しかし、義母やふたりの娘たちによる、彼女への不当な仕打ちにもかかわらず、マリアは、何一つ不平を言いませんでした。

ある日、彼女が井戸から水を汲んできて、義母とふたりの娘の服を洗い始めた時、彼女は弱って

しまい、疲れきって、気持ちを抑えきれなくなって、泣きました。しかし、すぐに彼女は平静さを取り戻し、涙を拭き取り、汚れた服を洗い始めました。彼女が仕事を始めるやいなや、彼女は女性の声を近くに聞きました。それは、とても聞き覚えがありました。「マリア、泣かないで！」と、その声は言いました。「さあ、あなたに食べ物を持ってきましたよ。あなたが空腹で、今朝、朝食をたべていないのを、知っていますよ。」

マリアはまわりを見ました。しかし、だれも見えません。しかし、おいしい食べ物がいっぱい盛られた大きな皿は見えました。彼女はしきりに皿から食べ物を取り出して、むさぼるように食べました。彼女の皿が空になり、それを地面に置くと、彼女が驚いたことには、洗い桶のとなりに、大きなカニが座っていました。

「驚かないで！おまえ。」とカニは言いました。マリアはカニがしゃべることにびっくりして、最初は、どのように対応したらいいか、わかりませんでした。カニは続けて、「私はおまえの死んだ母の生まれかわりだよ。今から、私はおまえの世話をし、お前を守ってやる。約束するよ。」

マリアはカニの言った言葉で元気になりました。彼女は、今度は微笑を浮かべて、選択を続けました。

毎日、井戸に洗濯に来ると、大きなカニは、彼女のためにおいしい食べ物の載った皿を用意して待っていました。マリアは幸せになりました。死んだ母の霊が彼女の世話をしてくれるからです。

ある日、マリアが井戸のそばで服を洗っていると、義母が近づき、すぐに市場へ行って、夕食のために食べ物を買うように言いつけました。マリアが出かけると、義母は大きなカニが井戸のとなりにいるのに気づき、掴まえました。「このカニは、私と娘たちのおいしい食事の材料になるよ。」と義母は言い、大きなカニを家に持って帰りました。

マリアが市場から帰って来る前に、義母は大きなカニを調理して、彼女とふたりの娘は、カニの

殻にあるすべての身を食べてしまいました。

マリアが市場から帰ると、義母に食卓を片付けるように言われ、彼女はぞっとしました。義母とふたりの娘が、大きなカニをすべて食べていたからです。それには、死んだ母の魂が含まれていたのです。マリアは、悲しみに打ちのめされました。義母とふたりの娘は台所から出ていたので、彼女は残ったカニのからのことで泣いてしまいました。

しかし、マリアの涙は、すぐに、よく聞き慣れた声によって、止められました。「心を乱してはいけないよ、マリア。私は大丈夫さ。」母の声が、空っぽのカニの殻から聞こえてきました。マリアはびっくりしました。また、母の声が聞こえるとは思ってもみなかったからです。「殻と骨を取って、」安心させるように声は続けて、「それを庭へ持って行き、家の隣りに埋めなさい。」

マリアは声が教えたとおりに、カニの殻と骨を庭に持って行き、家の隣の土の中に埋めました。

次の朝早く、マリアは、庭の井戸から水を汲む途中で、前の晩にカニの殻と骨を埋めた所から高い木が育っているのに驚きました。このすばらしい木の枝は、たくさんの黄金の身をならせていました。

マリアの義母とふたりのねたんだ娘は家を飛び出して来て、庭の新しい木に驚きました。ふたりの義姉妹は、木の枝に飛びついて、黄金の実を取ろうとしました。しかし、いくら高く飛んでも、二人の娘は、実には届きませんでした。マリアはひとりで、静かに微笑みました。不器用な姉妹が、飛んだり、落ちたりしているのが、へんてこなヨーヨーのように見えたからです。「お前、何をじっと見て、考えているんだ。」と怒った義母は、見苦しい娘たちを見ているマリアに言いました。「急いで、お前の仕事に行きなさい。」マリアは、彼女の頭を下げ、井戸へ水を汲みに、歩いて行きました。

木から黄金の実が取れないので、義母と彼女の、疲れて、イライラした娘たちは、ついに、庭から出て、家の中に入りました。庭にまたひとりにな

って、マリアは木の方に歩いて行き、枝に近づいて、黄金の実を取ろうとしました。すると、あたかも魔法のように、枝は低くなって、マリアの方に傾き、黄金の身のひとつが落ちて、楽々と彼女の手に入ってきました。マリアは、その実を食べました。それは、彼女が今までに食べたどんな果物よりも、果汁が多くて、おいしいものでした。彼女は、自分が黄金の実を食べられることをだれにも言わないことにしました。

ある日、若いハンサムな王子が、たまたまマリアの家にさしかかりました。マリアのふたりの義姉妹は、庭で休んでいて、そのハンサムな男を見た時、胸がドキドキしました。王子は、黄金の実をつけた木に興味をそそられ、姉妹たちに、取ってくれないか、と頼みました。ふたりの姉妹は、木の枝に向かって、できるだけ高く飛びました。しかし、いくらやっても、彼女らは、おいしい黄金の実に届きませんでした。イライラした姉妹は、ついに飛びつくのをあきらめました。王子は、彼女らのぎこちない、滑稽さを、密かに笑っていました。

ふたりの姉妹は母を呼び、すぐに彼女は庭でそれに加わりました。彼女らの母は、魅力的な王子に、この黄金の実は取ることができないこと、しかし、いずれにせよ、その実は悪いもので、努力する価値がないことを告げました。しかし、がっかりした王子が出てゆこうとした時、彼は美しい声が彼に語るのを聞きました。「私があなたに黄金の実を取って差し上げます、殿下。」と声は言いました。「そして、それはおいしいこと、請け合いです。」

みんなは振り返って、マリアが礼儀正しく、ハンサムな王子に、おじぎをしているマリアを見ました。王子は、彼女の純真な美しさに、すぐに後ずさりしました。「彼女の言うことを聞かないでください。」とマリアの義姉は言って、マリアを脇に押しつけました。「彼女は、自分が何を言っているのか、わかっていません。」

しかし、王子が中に介在して来て、マリアを木の方に導きました。「私は、少なくとも、彼女に

疑いを晴らすために、させてみなければならぬ。」彼は、マリアに笑って言いました。何の努力もなしに、マリアは、木の枝に届き、黄金の実、彼女の手の中に落ちてきました。彼女の義母とふたりの娘はびっくりして、口がきけませんでした。王子は、マリアが実を渡してくれて、食べている彼を見たので、たいへん幸福な気持ちになりました。「まったく、おいしい。」というのが、彼の判定でした。彼はマリアの手に口づけをして、もし、毎日彼が庭を通ると、もっと彼に実を取ってくれるか、と問いました。マリアは喜んで、王子の要請に同意しました。そして、義母とふたりの娘は、王子と論ずることができませんでした。

そして、その時から毎日、王子はマリアに会いに庭に来て、彼のために黄金の実を取るように頼みました。次の数ヶ月、ふたりは恋に落ちて、ある日、王子は、マリアに妻になるように頼みました。義母とふたりの娘の怒りと嫉妬の中にあっても、マリアは一瞬の躊躇もなく、王子の申し出を受け入れました。

マリアと王子は、マリアの義母と姉妹のねたみの中で、すぐに結婚し、彼の豪華な館に住みました。マリアは、彼女の庭の木から、黄金の実のひとつを取って、王家の館の庭に植えました。まもなく、もうひとつのすばらしい木が、おいしい黄金の実をつけて、王家の庭で育ちました。マリアは、彼女の母の霊が、永遠に彼女と彼女の新しい夫を見守っている、と確信しました。